令和8年2月2日（月）通巻1954号　昭和47年12月11日第3種郵便物認可 毎週月曜日発行（第５月曜日休刊）

2026年 2月2日 No.1824

週刊 教育資料

EDUCATIONAL PUBLIC OPINION　http://www.kyoiku-shiryo.co.jp

潮流 犬がいる居場所を学校に

一般社団法人日本スクールドッグ協会 代表理事　青木潤一 ㊤

資料 検討資料⑥　調整授業時数制度等の具体化について

――総則・評価特別部会

CONTENTS

▶ 2 潮流
犬がいる居場所を学校に
青木潤一（一般社団法人日本スクールドッグ協会 代表理事）㊤

▶ 5 解説・ニュースの焦点
○「調整授業時数制度」の具体案示す
○「道徳」「総合」「特活」の関係を整理
編集部

▶ 8 特集
幼稚園などの虐待防止・対応で
ガイドライン改訂
編集部

▶14 校長講話
身近なところから始まるユニバーサル社会
並木浩子（東京都・昭島市立昭和中学校 元校長）

▶16 実践！ 校長塾
言葉でつなぐ学校③
池田 靖（埼玉県立白岡高等学校 校長）

▶19 資料
検討資料⑥　調整授業時数制度等の具体化について
総則・評価特別部会

▶33 Voice

▶35 教育問題法律相談
部活動の地域移行と地域連携の違い
加藤昌子（弁護士）

▶36 学習指導要領のイデアを実践する
「多様性の包摂」の重要性と学校現場の課題
玉置 崇（岐阜聖徳学園大学教育学部 教授）

▶38 私たち、子どもの全力サポーター！
「張りぼて」の自分でいいの？
酒井道子（公認心理師）

▶40 地方議会から〈注目の質問ダイジェスト〉
学びへの支援③
編集部

▶42 変わる教育委員会
「こどもまんなか」を支えるのは、大人の笑顔
―ある自治体の挑戦―①
並河 健（奈良県・天理市 市長）

▶44 現場仕込みのメンタルケア論
「正義の語り手」だと勘違いしないために
川上康則（東京都・杉並区立済美養護学校 主任教諭）

▶46 再考！防災教育
先人の知恵と努力に学ぶ②
「防災地元学」のすすめ
小田隆史（東京大学大学院総合文化研究科 准教授）

▶47 BOOK
『主体的な学び手を育てる国語授業』
全国国語授業研究会、筑波大学附属小学校国語研究部
『16歳からのリーダーシップ』―條和生、細田高広

▶48 自著を語る
『だれもが幸せへと歩む学校
子どもも先生もウェルビーイングに生きる』
前川智美（横浜創英中学・高等学校 教諭）

▶51 データで見る教育
次期学習指導要領に向けた検討の基盤となる考え方

▶52 マイオピニオン
青い鳥を見つけるヒント
清水弘美（創価大学 非常勤講師）

潮流

一般社団法人日本スクールドッグ協会
代表理事
青木潤一（あおきじゅんいち）さんに聞く（上）

大阪府出身。大学卒業後、中学校教諭として15年間勤務。在職時に学校で犬を飼う取り組みを実践。退職後、2021年に学校へスクールドッグを派遣する事業を行うSocial Animal Bondを設立。2022年に一般社団法人日本スクールドッグ協会を設立し代表理事に。動物介在教育支援士、学校教育アドバイザー。

犬がいる居場所を学校に

犬とのふれあいを中心とする動物介在活動・教育のほか実践者養成の講習会などに取り組んできた。

盲導犬になれなかった犬に親しみ

――日本スクールドッグ協会の目的や活動内容について教えてください。

青木　日本スクールドッグ協会は、犬とのふれあいを中心とする動物介在活動や動物介在教育を推進することで、動物介在教育などの理解と普及を図ることを目的にしています。活動内容としては、普及活動のほかに動物介在教育に関する研究と調査や講習会の開催、実践者の養成――などに取り組んでいます。

――中学校の教員時代、飼育していた犬を学校に連れて行ったと聞きました。

青木　東京の私立学校の先生が教室に犬を連れてきていることをニュースで知り、興味を持ちました。２０１７年のことでしたが、盲導犬の訓練をしていていたけれども最終的に盲導犬にはなれなかった犬を引き取って飼育しました。自分が勤務する私立中学校の学校長の許可を取って３年間、学校に犬を連れていきました。その結果、生徒たちの表情がとても良くなり、学校の雰囲気も良くなったのです。「犬は、すごい力を持っているな」と実感する機会になりました。

ただ、私が定年で教員を辞めると、こうし

た取り組みもなくなってしまうだろうなと思いました。個人の思いつきではなくて、仕組みとして訓練された犬を学校に派遣していくことが必要ではと考え、学校を退職して、自ら仕組みづくりに取り組もうと思いました。

――生徒たちの表情が良くなったとのことですが、具体的には。

青木　勤務していた私立中学校は、進学校で、比較的裕福な家庭の生徒が多かったのですが、ストレスを抱えている生徒もいました。自分の飼い犬を学校に連れて行ったことで、劇的な変化があったわけではないですが、少しずつ、犬がいる学校の環境が当たり前になったことで、生徒たちには、じわっと浸透していったように感じます。

生徒たちからすると、「盲導犬になれなかった犬」ということで、安心感や親しみを持てたようでした。また、犬は言葉をしゃべるわけではないので、教師や親のように、日頃から口うるさい人間とは違います。試行錯誤しながら意思疎通に努めるという接し方も生徒には新鮮だったと思います。

動物介在教育支援士を認定

――日本スクールドッグ協会の活動の様子について教えてください。

青木　活動を始めて8年目になりますが、協会設立前は、学校現場や放課等デイサービス、学童クラブなどに私が犬を連れて行って、こうした取り組みを知ってもらう活動から始めました。ただ、個人の活動では行ける地域などにも限界があります。そこで、犬を活用した動物介在教育がきちんとできる資格をつくったり、スクールドッグを導入した学校をサポートできたりする仕組みが必要と考えて、日本スクールドッグ協会を立ち上げることにしました。

私たちは「ハンドラー」と呼んでいますが、これは簡単に言えば飼い主のことです。ただ、単なる飼い主ではなくて、教育実践に基づいたスクールドッグの取り組みを理解できる飼い主のことを指しています。学校に犬を派遣したりする場合は、アレルギーへの対策や犬を怖がる生徒への対応などを理解して、きちんと学校側に告知できる人が必要です。このハンドラーを、正式には、「動物介在教育支援士」として認定するようにしています。

――青木さんは、Social Animal Bondという組織の代表もされています。

青木　Social Animal Bondでは、学校や施設の中でも安全に過ごすことができるように訓練されたスクールドッグを介在させる活動に取り組んでいます。①イベント等で、スクールドッグと触れ合える体験活動②定期的に学校などを訪問し、スクールドッグと日常的に関わる活動――があります。

また、動物介在教育の進め方や活動期間の長さとして、おおよそ次の四つのステップ（①「命」との出会い②犬との信頼関係の構築③自発的な養護性の発動④生徒が主体となる探究的な活動へ）――を提案しています。

ステップ①（3カ月目まで）では、犬の生態を知ることで、「命とは何か？」「生きているとは何か？」について体験を通して学びます。ステップ②（4カ月～7カ月目まで）で

は、人から犬への一方的な愛情ではなく互いの信頼関係を醸成する期間で、「絆」が生まれ、「責任感」も育みます。

また、ステップ③（8カ月〜12カ月目）では、生徒個々に合わせた動物介在教育が定着していきます。生徒にとって「居場所」としてのスクールドッグから、お世話係を通しての活動まで、幅広い取り組みに転換されていく段階です。さらにステップ④（1年後以降）は、動物介在教育の最大の魅力がこの段階から始まります。これまでの活動を踏まえて、生徒同士の学び合い（探究的な活動）が生まれます。学内での飼育ルールを考える、学内外に取り組みを発信する、地域社会との交流に活用する、犬と一緒の朝のあいさつ運動をする、犬猫の殺処分の問題を考えるなど、さまざまな活用方法が考えられると思います。

なお、生徒だけでなく、教員や保護者を癒やす存在にもなり、学校のマスコットキャラクターとして、地域社会と学校の「架け橋」にもなります。

他者への思いやり、優しさを育てる

——「自発的な養護性の発動」や探究的な活動への展開などの視点は面白いですね。

青木　最近は、学力面だけでなく非認知的な能力の育成も課題になっています。つまるところ、スクールドッグが学校にいることで、生徒にとっては安心できる居場所になり、犬とふれあう楽しさや癒やしの空間にもなります。また、それだけではなく、犬の気持ちを読み取ったり、お世話をすることでの責任感も育まれます。こうした体験が他者への思いやりの心や優しさを育成することにつながるのではないでしょうか。

もちろん、スクールドッグの導入段階では、教員など大人やハンドラーなどが関わることは多いと思いますが、教員主導ではなくて、子どもたちが自立的・主体的に取り組めるようにしていくことがポイントです。

ただ、私自身は、教員時代は生徒の探究的な取り組みに力を入れていたのですが、探究の結果のプレゼンが上手な子どもが評価されがちではないか、という反省もありました。ですから、探究的な学びなどの「学び」の部分だけでなく、犬がいることで安心できる、楽しいと感じることに、まず意味があるのではと考えています。

——いじめや不登校対策などに、動物介在教育を無理につなげないということでしょうか。

青木　例えば、不登校の問題も、当事者である子どもたちが抱える事情や要因はさまざまです。動物介在教育は、その解決策になるという安易なものではないと思います。ただ、学校に犬がいて、そのお世話をすることで、「自分は役に立っている」と、自己肯定感を高めるきっかけになることはあると思います。学校生活のストレスを軽減させることにもつながるケースがあります。

全国の学校現場でのスクールドッグを活用した動物介在教育の事例については、ホームページなどでも紹介していますので、ぜひ、ご覧いただければと思います。また、学校関係者の方から、気軽に相談をお受けしたいと思いますので、お問い合わせいただければ幸いです。

一般社団法人日本スクールドッグ協会＝https://schooldog.jp/

Social Animal Bond＝https://www.social-animal-bond.jp/